情報グループ③

Webメールによるコミュニケーションの広がり
～卒業後の豊かな生活の助けになることを願って～

荻野稔朗

1．研究の概要

本校では、メディアルームで自由にコンピュータを使える環境になっており、生徒が休み時間などに自由にコンピュータを使っている。使用内容はゲームがほとんどだが、高等部の生徒は自分の好きなホームページの閲覧をしていることが多いようである。

本研究では、高等部の「情報」を選択した生徒3人を対象とし、現在主に情報の受信源としているコンピュータを、Webメールを通して情報の発信源としても利用し、コンピュータとのかかわり方の変化をみていく。コンピュータリテラシー*1の向上を図ると共に、卒業後のQOLの向上を期待している。

研究にあたってはネット上での安全性を考慮し、一般の「フリーメール」等は使用せず、本校のメールサーバによるWebメールを使用した。

2．「情報」の時間を利用して

週1回、水曜日の「情報」の時間に、コンピュータを利用した情報のやりとりを中心に生徒と一緒にできることを考えてみたところ、「情報」の授業を選択した生徒の中には積極的に校内郵便*2を利用している者がおり、メールなら情報の発信・受信が比較的容易にできることから、これを本研究のテーマとした。また、いろんな時間・場所でできて卒業後もしやすいよう、特定のコンピュータに限らずに使えるWebメールを使用することにした。

（1）Webメールについて

メリットは、Webブラウザ*3で利用することができ、通常のメールと違ってすべてのメッセージをサーバ側で管理するため、どこからでもメールをチェックしたり過去のメールを参照したりできる。また、Webブラウザが利用できればコンピュータやOSの種類（WindowsやMacintosh等）を問わない。必要に応じて無料の「フリーメール」サービスへの移行もしやすい。

デメリットとしては、使用のたびにWebメールのサービスをしているメールサーバにアクセスして「ユーザー名」（あるいはユーザーID）と「パスワード」を入力する必要があり、使い勝手が悪い。本校の場合は、ホームページのトップページにWebメールサーバにアクセスできるボタンを配置した。

（2）コンピュータリテラシーの向上について

Webメールは、日頃コンピュータでWebページの閲覧程度は自由にできている生徒には、そこから相互コミュニケーション（インタラクティブ）の手段にもなるとても興味深いものであると考える。使える場所・コンピュータを選ばないことからより利用頻度が上がり、また通常のメールに比べて手順が多いことから、生徒のコンピュータリテラシー*3の向上につながっていくことを期待した。

（3）卒業後のQOLの向上について

Webメールは、いつでもどのコンピュータからでも発信できるので、卒業後などに新

しい環境での心配事や悩み、楽しかったことなどをメール相手と交換できる。いつでも相談できる相手、楽しいことや悩みを共感しあえる相手がいることは、卒業後の生活を精神面で支え、豊かにしてくれることにつながるのではないかと考えた。

＊1　コンピュータリテラシー：日常生活でコンピュータを利用して課題を解決するための基礎的な知識や技能の集合である。コンピュータの基礎的な動作原理や特性、適用場面の理解や、キーボードやマウスなど機器の扱い方、文字入力や基本的な操作方法、データや情報の処理方法などが含まれる。

＊2　校内郵便：数年前から始まった、教室の前に設置したポストに手紙を入れると生徒が届けてくれる校内郵便。毎日のように、生徒間や先生相手に手紙のやりとりが続いている。

＊3　Webブラウザ：Webページを閲覧するためのアプリケーションソフト（インターネットエクスプローラーなど）

3．生徒の実態と変化

（1）夏休み中の様子

1学期末の保護者懇談で、それぞれの保護者にWebメールの使い方を説明し、夏休み中に家でも利用してもらえるよう依頼した。懇談会にはそれぞれ母親が参加したが、家では父親や妹のコンピュータを使うということからか、説明後すぐは誰からもメールが届かなかったが、夏休み前の連休から少しずつ家から送信したメールが届き始めた。

表1　生徒の実態と変化（夏休み中）

生徒名	コンピュータの利用状況	Webメール	夏休み
A	一人でWebブラウザを開き、ほとんど決まったアニメキャラクターのHPを閲覧している。 学校のHPなどを見てみるよう指示しても、すぐ戻ってしまう。	使い方の理解は早く、メールの文章を完成させるまで頑張っていた。 文章を作るのは苦手で、行事名の羅列になりがち。	家で使用できるのは父親のコンピュータ（Mac）。 コンピュータ操作はほとんど一人ででき、文面を考えてもらって、時々メールを出している。 とても喜んでいるとのこと。
B	一人でWebブラウザを開き、好きなテレビ番組のHPなどを閲覧している。 学校のHPを教えると、楽しそうに見ていた。	大好きな友だちや先生からメールが届くので、とても興味をもって取り組み始めた。 文章を打つのもうまい。	家で使用できるのは父親のコンピュータ。 生徒・先生相手によくメールを出している。夏休みの生活の様子が伝わってくる。
C	一人でWebブラウザを開き、好きなアイドルのHPなどを閲覧している。 学校のHPを教えると、興味深く見ていた。	大好きな友だちにメールを出せるので、とても興味をもって取り組み始めた。 文章は正確ではないが、気持ちがこもった内容。	家で使用できるのは妹のコンピュータ。 決まった生徒・先生に、時々メールを出している。見ているテレビ番組の話などが中心。

（2）2学期の量的な変化

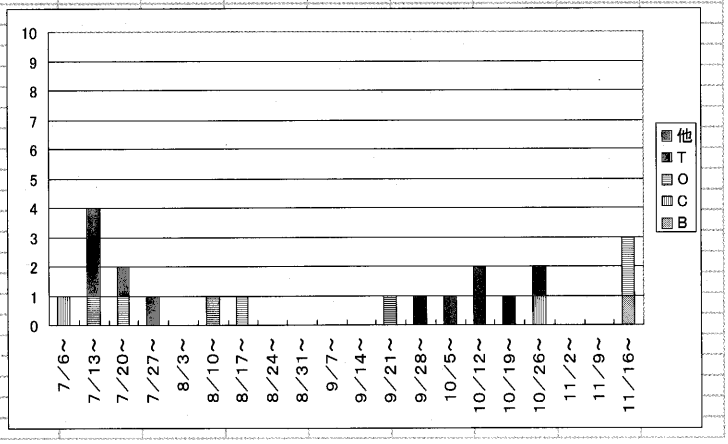
Webメールの利用状況に大きな変化がなかった夏休み中に比べ、2学期は行事がたくさん続くため話題が多く、また日常生活の中でコンピュータに向かう習慣がついてきたの

か、Webメールの利用状況に大きな変化が見られた。(**表2**参照)

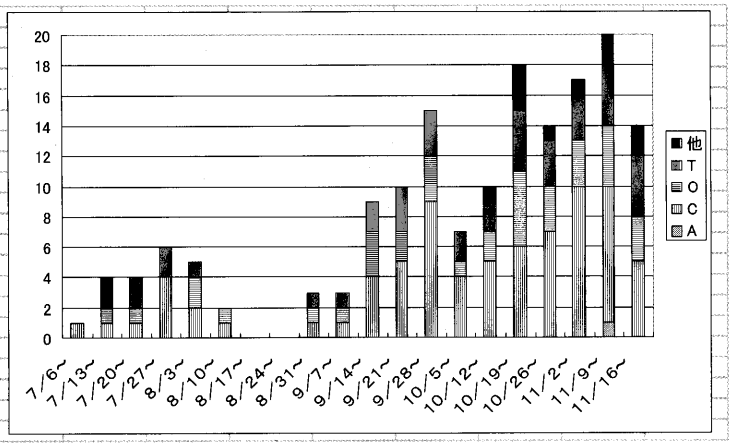
表2　Webメール利用状況

Webメール送信数

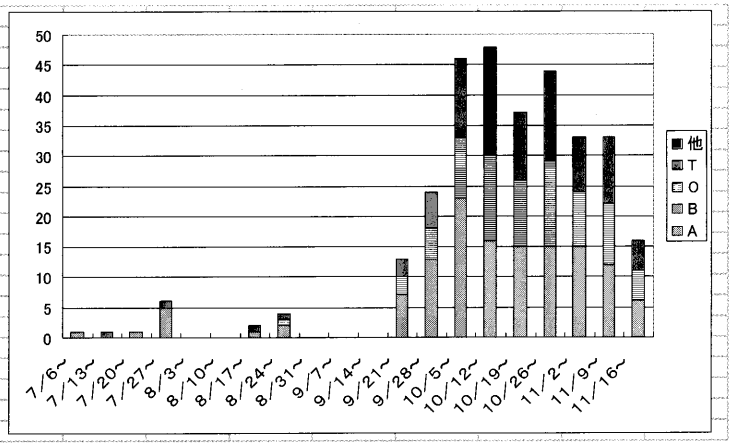
from A	B	C	O	T	他
7／6～		1			
7／13～			1	3	
7／20～			1	1	
7／27～				1	
8／3～					
8／10～			1		
8／17～			1		
8／24～					
8／31～					
9／7～					
9／14～					
9／21～			1		
9／28～					1
10／5～					1
10／12～					2
10／19～					1
10／26～		1			1
11／2～					
11／9～					
11／16～	1		2		



from B	A	C	O	T	他
7／6～		1			
7／13～		1	1	2	
7／20～		1	1	2	
7／27～		4		2	
8／3～		2	2	1	
8／10～		1	1		
8／17～					
8／24～					
8／31～		1	1	1	
9／7～		1	1	1	
9／14～		4	3	2	
9／21～		5	2	3	
9／28～		9	3	3	
10／5～		4	1	2	
10／12～		5	2	3	
10／19～		6	5	4	3
10／26～		7	3	3	1
11／2～		10	3	3	1
11／9～	1	9	4	4	2
11／16～		5	3	4	2



from C	A	B	O	T	他
7／6～		1			
7／13～				1	
7／20～		1			
7／27～		5		1	
8／3～					
8／10～					
8／17～		1		1	
8／24～		2	1	1	
8／31～					
9／7～					
9／14～					
9／21～		7	3	3	
9／28～		13	5	6	
10／5～		23	10	13	
10／12～		16	14	18	
10／19～		15	11	11	
10／26～		15	14	15	
11／2～		15	9	9	
11／9～		12	10	11	
11／16～		6	5	5	



※A、B、Cは生徒。O、Tは教師。他は学生や保護者宛。縦軸はメール送信数。

(3) 質的な変化

Aは一人で文章を作るのが苦手である。その一方でコンピュータ操作には慣れており、コンピュータグラフィックスは一人で時間をかけて丁寧に描いたことがある。それを送れるようになったらと期待していたが時間的な制約もあって実現しておらず、メールの発信数そのものもあまり増えなかった。

Aの変化は9月の教育実習がきっかけで、「情報」の授業に教育実習生が見学にきたと

きに自分から得意気に好みのホームページを見せていた。その後の「情報」の授業でいつものようにメールを送りたい人を尋ねると、教育実習にきた学生の名前が出てきた。その場では学生さん本人には送れなかったため、学生さんの名前宛で荻野のアドレスに送信してもらった。印刷したものを学生さんに渡すととても喜んでもらえ、連絡帳で伝えると家の方も喜んでおられた。その後、一人の学生さんから直接Aのアドレス宛にメールが届き、直接のメール交換ができるようになった。家でもメールの内容で会話することが増えてきているそうである。

BはCやTと、もともと校内郵便や交換ノートを利用しており、文章で自分の思いを伝えることに慣れている。お盆のあたりから3週間ほど家のコンピュータが故障していてWebメールを利用できない時期があったが、9月からは部活のこと、教育実習のこと、授業や現場実習のことなど多彩な話題でコンスタントにたくさんメールを発信していた。

B自身の現場実習の前にはそのことを話題としたWebメールが増え、現場実習でまったく学校に来られなかった10月25日からの2週間の間も家からたくさんメールを発信していた。実習先での作業内容や、周りの方と仲良くなれたこと、体調のことなど、実習中の本人の様子がよく伝わってきた。こちらからも学校であったことや友だちのことをその都度Webメールで伝えることができ、本人も情報が入ってきて喜んでいたそうである。

CはBやTと校内郵便を交換している。校内郵便も波があり出したり出さなかったりである。Webメールは一人でログインできないためか、9月下旬まではときどき利用しているだけだった。内容に友だちのことが入っている点が校内郵便とは違う一面だった。

大きな変化は10月3日からの現場実習の1週間前くらいからで、Webメールの利用が突然増え始めた。現場実習で学校へ来られなかった1週間の後半をピークに多い日には一日に9～12通のメールを発信していた（3人に対して3～4通）。ログインをしてもらえば後の操作は手際が良い。1分間隔で違う人にメールを発信したりするかと思えば、じっくり時間をかけて長いメールを打つこともあった。現場実習で学校を離れている間も友だちや先生とつながりをもてる大事な要素になっていたようである。発信は朝、昼、夕方、夜といろんな時間帯にしており、家庭生活の中で大きなウエイトを占めるようになっているようである。学校においてもメールの話題を通してかかわりがとても多くなった。

4．まとめ

当初は一般の「フリーメール」サービスの利用を考えたが、本研究グループとして安全性を考慮し、本校のメールサーバを利用することにした。本校のサーバ管理者に、本校メールサーバへのWebメール機能の導入と生徒用のIDの登録をしてもらった。

3人の生徒のうちAとBは自分でログインをできるようになっている。最初のキーワード入力後はほとんどマウスクリックだけで閲覧ができるホームページの閲覧に比べると、Webメールはその都度文章入力もあり、コンピュータリテラシーの向上につながっていると思われる。

メールを交換したい対象が広がったA、話題が豊富で情報の発信と受信に大いに役立てているB、現場実習で学校を離れている期間に積極的に利用し、学校の友だちや先生とつながりを持ち続けたC。Webメールはそれぞれの生活を一回り豊かにするのに役だったようである。特に学校を離れていた現場実習の期間中に有効に利用されたことは、卒業後のQOLの向上につながることを期待できる大きな要素と考える。